
翡翠と少女達 ~ 遠く離れた世界で ~

Akatuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翡翠と少女達 ー遠く離れた世界でー

【Nコード】

N8232Z

【作者名】

Akatuki

【あらすじ】

一つの物語の変化が、少年に時を、世界を越えさせる。その瞳で少年はどのような世界を映すのだろうか……。

なのはGODアフターIF物＋独自設定＋ご都合主義です。

第0話（前書き）

試験的な意味でも、本格的に頑張る意味でも上げてみます。

とりあえず注意点を、

・ 作者は説明が苦手です。彼女達をしっかりと説明出来るか不安です。

・ 矛盾も生じるかと思われます。

・ キャラのイメージを壊してしまうかもしれません。

・ あの世界に関しては想像（妄想）して書きます。

・ 駄文注意報

とりあえずプロローグです。

では、どうぞ。

第0話

とある少年が言った、こんな言葉がある。

「――世界はこんなはずじゃなかった事ばかりだ。

身体に走る激痛によって霞む意識を強制的に覚醒させられる中、少年は壁に身体預けた体勢――いつでも動けるように――でその言葉を思い出していた。

「……全くだよ。クロノ」

少年はその言葉を一人の女性に言い放った悪友の名前を呟く。誰もが人の不幸などを知った時、意識的にでも無意識的にでも思うことであろう。

まさか、自分はそんなことにならないだろう。と。

だが、その考えこそ間違いだ。

不幸も幸福も差はあれど差別無く人々に降り懸かる。その不幸が今、自分に降り懸かっているんだと少年は冷えた思考の片隅で結論づける。

「……………」

少年は極力息を潜める。

見つかるわけにはいかない。

なぜなら、死にたくないから。

友人達を悲しませたくない

から。

悲痛に顔を歪めた彼女に笑って欲しいから。

だが少年の思いとは裏腹に、現実是非情だった。

――。

視界の端に、赤い点が浮かんでいるのに少年は一瞬遅れて気がついた。

すぐさま逃げ出そうとするが体に力が入らず、足を躓かせて倒れてしまった。

(逃げ……ない……と)

頭ではそう考えても、体が動かなければどうしようもない。スウィットと「奴ら」が近づいて来るのが感じられる。

(何とか、何とかしないと)

少年が必死に頭を働かせる。

この絶望的な、死が目前に迫っている状況を打破する方法を見出すために。

最期まで、最期まで諦める訳にはいかない。

この身にも、不屈の心はあるのだから。

――。――。

少年の視界の外では、ついに「奴ら」が少年の場所へ辿り着き、腕らしき場所に備わっている刃を上振り上げる。

そして「奴ら」が刃を振り下ろそうとした――次の瞬間、

――！！！！！！

突如耳に響く轟音が周囲に響き渡り、床が崩壊し、少年と「奴ら」

は諸とも下へと落下していった。

少年が気がつくのと、辺りは漆黒の闇に覆われ、視界が全く意味を成さなかった。

「……………ひとまず、助かったかな」

状況が好転した訳では無いが、眼前に在った死神から逃れられた事に安堵の声を漏らす。

「……………ああでも、傷開いたなあ」

まるで人事の様に呟く。
止血等の応急処置はしたが、元が重傷のため焼け石に水の状態であったのだ。

なけなしの魔力を傷口の治癒に回しながら、分割した思考の中でこれからすべき事を模索する。

「……キーンッ！」

「……………ん？」

すると、何処からか少年の耳に金を引つ掻く様な高音が届いた。
最初は小さな音だったが、徐々に大きな音に変化していき、最終的には頭を掻き乱す様な不快な音と為った。

「……………っ！！あぐうっ……………」

少年に激しい頭痛が襲い掛かり、思考がバラバラに分解される。それが原因で塞がりかけていた傷口が再び開き流血を始める。

「・・・・・・・・つ！！？」

少年の意識が闇に沈みこもつとした瞬間、少年の瞳にある風景が写り始めた。

「――そこは病に犯された故郷の星を、人々と機械達が協力して元の緑豊かな姿に戻すために日々努力している世界。その世界に人々と共に笑顔を浮かべている六人の少女の姿があった。」

少年の視界が元の暗闇の世界を写す。

それと同時に離れた場所からまばゆい極光が生まれ、暗黒の世界を、少年を間もなく飲み込む。

数秒経ち、光が収まると元の漆黒がそこにあった。

だが何処にも、確かに存在していたはずの少年の姿がなかった。

第0話（後書き）

これから頑張っていきます。

御指摘等はお気軽に。

では、次話でお会いしましょう。失礼します。

第一話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

まだまだ話は進みません。

— 先ず、最初の主なメイン達が登場します。
それでは、どうぞ。

第一話

青空の下、道行く人達と元気に挨拶の言葉を交わしながら、少女は自身の家族が待つ家への帰路を歩いていく。

今日も少女は出没した危険生物をスバツと退治し、気分爽快と上機嫌な様子だ。

そして自宅が視界に映ると、足取り軽やかに走りはじめ、その勢いのままドアを蹴破る。

「シュテるんたっだいま〜!」

「はい、お帰りなさいレヴィ。言うまでもありませんが、ドアは自分で直しておいてください」

家の中にいた少女、名をシュテルが無表情のまま帰ってきた少女、名をレヴィを迎える。

レヴィの行動をしつかり釘刺す辺りは、もう活動的な彼女の行動には慣れっこのようだ。

「怪我はしていませんね」

「あつたり前じゃん。あんな奴なんか僕にかかればノーダメ秒殺大勝利っ!!!だもんね!」

「それは何よりです」

大仰にポーズを決めながら説明するレヴィの頭をナデナデするシュテル。

レヴィは「えへん」と胸を張って満足そうにする。

「そうそうシュテるん。僕お腹空いたあ」

「そう言つと思つて、既に食事の用意は整っています。早く手を洗つてきてください」

「はい！」

元気良い返事と共に手を洗いに行くレヴィを見届け、シュテルは先に食卓の方へと移動しようと体を方向転換しようとした。

そんな時だった。

「シュテルさん。シュテルさんは居るか？」

未だに蹴破られてそのままの玄関のドアから、息を切らせた男性が入ってきた。

「どうしたのですか。そのようにお急ぎのご様子で。まずは呼吸を整えてください」

「あ、ああ、すまねえ」

言われた男性は深呼吸を数回繰り返し、自身が落ち着いたのを確認して、口を開いた。

「それが広場が突然光つたと思ったら、いきなり人が倒れていてな」

「はい」

「どうにも誰もその人の顔を知らなかったので、顔が利くシュテルさんなら誰か知っているのではないかと」

「事情は承知しました。では、今から参りましょう。その人は今どうしていますか」

「今はリークさんの家で寝かしてるよ」

「わかりました。レヴィ、少し私は出かけます」

シュテルがそう言うと、レヴィは慌てた様子で戻ってくる。

「待つて待つて僕も行く！一人で食べたって美味しくないもん」

「わかりました。では行きましょう」

知らせに來た男性を先頭に、シュテルとレヴィは件の人物の下へと向かった。

道中、シュテルは先頭を歩く男性、クウジにその人物の特徴を聞いていた。

「その人物の特徴は？」

「ああ、髪は金髪で目は澄んだ翡翠、体格は華奢で顔は女顔の男だ」

「そうですね」

自他ともに顔が広いと認めている自分でも、その様な人物はこの世界では知らない。

と、この世界では。というフリーズの所でシュテルは遠く離れた世界で過去に一度対峙した、ちょうどその特徴が当て嵌まる人物を思い浮かべた。

「……ないと思いますが」

「ん？どつたのシュテルん？」

「いえ、何でもありません」

もし、もしもだ。

今考えた予想が当たっているのなら、驚愕に値する再会だ。とシュテルは思う。

何故なら、そうだとしたらあの世界で時間跳躍の方法が見つかったという事になるからだ。

まあもう他に考えられる事態として、厄介な事に巻き込まれたか、事故によってなどが考えられるが。

「シユテるん着いたよ！」

レヴィが大きな声で言う。

思考の海に漂っている間に目的地に着いていたようだ。

「どういう事にせよ、会えば分かる事です」

特別危険な事ではないでしょうし、どちらかと言えば不思議な事態です。とシユテル一旦思考するのを放棄する。

ここで二人を案内したクウジは自分の仕事場へと戻る。シユテルとレヴィは目の前の家へと入っていった。

「いらつしゃい。シユテルちゃんにレヴィちゃん」

「お邪魔します。リークさん」

「こんちわつす」

二人を出迎えたのは恰幅の良い男性、この集落のまとめ役であるリーク・エクレアだった。ちなみに妻子持ち。

「それで件の人物はどちらに」

「ああ、こっちの部屋で寝かしてるよ」

二人はリークの後ろをついていく。そして案内された部屋へと入り、中にあるベッドに寝かされている人物の顔を見た。

「……まさか、とは思いましたが」

「あれ？どつかで見た気がする」

「お？見覚えあるのか」

シユテルとレヴィの反応にリークは安堵の様子を見せる。

「ええ。少し記憶の中の彼と誤差がありますが、私の知り合いです。リークさんが懸念している様な人物ではありませんのでご安心を」

「むむむ……」

隣で唸りながら彼を思い出そうとしているレヴィをスルーし、シユテルは寝ている彼に淡々と言う。

「お久しぶりです。 師匠」

ベッドで寝ているのは、シユテルの姿形のオリジナルである少女の魔導の師、ユーノ・スクライアであった。

第一話（後書き）

登場人物達はユーノ達以外、アカツキのオリジナルとなっております。

御指摘等はお気軽に。

では、失礼します。

第二話（前書き）

展開が激遅ですが、ご了承ください。

まだキャラ達の口調が安定していません。

では、ごじや。

第二話

走る、走る。

少年はただ前へと足を動かす。

「……はっ、は……」

辺りは真っ暗。

前方はほとんど見えず、けれど後ろは決して振り向かず少年は走りつづける。

少年は逃げつづける。

後ろから迫り来る、「x」から犯されないために。

「……くっ！」

だが、「x」は徐々に距離を詰めてくる。

少しずつ、少しずつ。

そして、

『オマエハ「x」カラハノガレラレナイ』

そんな片言な声が聞こえた瞬間、少年の意識が暗転した。

「っ！！」

少年、ユーノ・スクライアは文字通り跳ね起きた。

そして忙しなく視線を周りに走らせる。

「……………夢、か」

妙にリアルな夢だったと額に浮き出た汗を拭きながら、力が抜けたようにポスツと体をベッドに預ける。

「……………ちょっと待って」

誰に言うわけでもないが、少年は呟き、もう一度視線を周囲に張り巡らせる。

目に映るのは半分ほど埋まった本棚と簡素な机、そして自分が寝ていたベッド、自分が今いる部屋。

「……………どこ？」

言葉を宙に遊ばせながら、少年は一気に覚醒した頭で思い出す。

自分は遺跡内部で死にかけていたはずだ。と。

少年が頭を働かせていると部屋の扉が開き、一人の少女が入ってきた。

「……………起きてる」

「え、えと……………」

少女はポツリと言うと、扉を開けっ放しのまま音も無く通路を歩いていった。

ユーノが頭の上に？を浮かべていると、今度は男性が部屋に入ってきた。

「よう坊主。目覚めたか」

「あ、はい。おはようございます」

「おうおはよう。ん？何だその顔は？」

「いえ、その、何故自分がここで寝ていたのか皆目検討がつかず」「まあ、そりゃそうだわな」

男性は顎に手を添えて考える仕種を見ると、一先ず、と言葉を添えてから続ける。

「朝飯食いながらもそこんこの話をするか。ほれ、起きろ」

ユーノは朝飯という言葉と同時に腹を鳴らしてしまい、男性に笑われながら、共に食卓へと向かう。

そこには、妙齡の女性と先ほど部屋を覗いてきた少女が既に椅子に座っていた。

上には既に朝食が四人分並べられている。

「ほれ、座れ」

「は、はい」

言われるがままに空いていた椅子、少女の隣に座るユーノ。

流されてきているユーノを置いて、男性達は胸の前で手を組んで目を瞑ること数秒の後、食事を始めた。

固まっているユーノも男性の「食べねえのか？」という言葉で食べ始める。

そのまま食事を始めてから少し経った頃、男性が口を開いた。

「だいたい腹も落ち着いてきたる。俺の名前はリーク・エクレア。隣の家内がサラサ、お前の隣に座っている娘がミーナだ」

男性、リークの紹介と共にサラサが小さく会釈し、ミーナはただジッとユーノを見詰める。

「それで坊主、名は？」

「え、ああ、僕はユーノ。ユーノ・スクライアです」

「ユーノか。よしユーノ、お前なんだ？」

「なんだ、と言われましても……」

何とも要領を得にくい言葉にユーノが困惑の表情を見せる。
実際、ユーノ自身まだ現状を正しく理解出来ていないのだ。

「すまん、聞き方が悪かったな。お前さんな、三日前に広場に突然現れたんだわ。それで気を失ってたから家に運んだんだが」

「それはご迷惑をおかけしました。……って、三日ですか？」

「おう。やけに服とか破けてたが外傷は見当たらなかったから不思議だったんだが、まあ大丈夫みたいだな」

今お前さんが着てるのは俺のお古だ。とユーノが着ているやや大きめの寝巻を指差す。

「外傷が見当たらない？」

ユーノがペタペタと自身の体を、主に脇腹辺りを念入りに触れる。その様子にリークは怪訝な顔になった。

「おいどうした？」

「確か、脇腹辺りを刺されたり、全身打撲の状態だったと思うんですけど……それに、自分は遺跡で死にかけていたはずですし」

「……は？」

何言っただこいつ。という顔で見るリークだが、ユーノの真面目な顔を見て事実だと悟る。

「マジか」

「マジです」

話を聞いていたサラサとミーナが目を見開く中、話を進めようとリークが口を開こうとした瞬間、

「その話、詳しく聞かせて頂きたいですね」

淡々とした声が四人の耳に届いた。リークが声の主へと顔を向ける。

「おお、ちょうど良い時に」

「朝早くからお邪魔いたします。ミーナからの念話で彼が起きたと聞きましたので、参りました」

抑揚の無い声、だが聞き覚えのある声に、ユーノはゆっくりとそちらへと顔を向ける。

そこには、幼なじみに似た少女の姿があった。

そして、ユーノはその少女の事を知っている。

「……シユテル？」

「お久しぶりです。師匠」

そこには、ジーツとユーノを見詰める少女、シユテル・ザ・デストラクターの姿があった。

第二話（後書き）

この次の話でGODで明かされた話等々を説明しようと考えたのですが、試しに書いてみたところゲーム内容を全部書きちゃうところでしたので止めました。

ですから、説明は本当に簡単にしちゃうか、もしくは読む方々がGODをプレイした前提で書いて行こうと思います。

ですから、わかんない箇所がある場合や、こいつ誰？とかいた場合はゲームをプレイしていただくか、ググってWikiするか、「あ、こんなキャラいるんだ」と軽く流すか、もしくはアカツキに質問してください。感想制限は外しておきますので、そこで出来る限りお答えします。

では長くなりましたが、この辺で失礼いたします。

第三話（前書き）

注意、ゲダゲダ。

今日はあともう一つ上げます。

ですので、これの後書きはありません。

第三話

「君達は確かアマタさんの故郷に行つたんじゃ」

「ええ行きました。一つお伺いしたいのですが、どのような方法で時間跳躍したのでしょうか」

シュテルに問い掛けたユーノは返ってきた質問に首を捻る。

時間跳躍とはどういう事なのだろうか。自分は何らかの力が働いて飛ばされただけだと思うのだけど……と。

そんな様子のユーノを見たシュテルはボンと手を打った。

「そういえば、記憶封鎖が掛けられているのです」

シュテルはユーノへと近づき、彼の額に手を当て、彼の記憶を解放する。

数秒ボーツとしたユーノだったが、ハツとした顔をする。

「……………シュテル」

「はい」

「ここ、アマタさん達の故郷のエルトリアなのかな」

「そうです」

ユーノはシュテルの返答に体を硬直させる。

顔の前で手を振っても反応を示さないので、シュテルは？を浮かべているリーク一家に言う。

「先に食事を済ませた方がよろしいかと思われます」

その言葉にとりあえず頷いた三人は、止めていた食事の手を動か
しはじめた。

皿を下げた後、今度はユーノの隣にシュテル、テーブルを挟んで
向かいにエクレア一家が座る形となっていた。

「それでは師匠、先ほど言っていた「死にかけていた」という発
言の説明をお願いします」

「え、あ、うん」

頭の中で整理が出来たのか落ち着いた様子で話しはじめる。

「僕は管理局――司法組織と同義と考えてください――の依
頼で数名の学者と護衛と一緒にとある遺跡の調査に行きました。内
部は多少の罠などはありましたが、調査は順調に進みました。そし
て中程にたどり着いた時に、突然アンノウンに襲撃されたんです」
「その時、僕は護衛の一人を庇って刺され……瓦礫で通路が
塞がれて皆と分断されてしまって、そのまま逃げ続けた後床が崩れ
て下の階に落ちました。それで気がついたらリークさんの家で寝て
いました」

ユーノの語りが終わわり、リーク達は困惑の表情を浮かべる。

それに対して、シュテルはあと溜め息を吐いて言う。

「護衛される人がする人を庇ってどうするのですか」

「……いや、うん」

目を逸らすユーノ。そこら辺は自分でも分かっているらしい。

「落下した後は覚えていないのですか？」

「全く覚えてないんだ」

「そうですか」

シユテルはリーク達の方を向き、何か質問はありますか。と訪ねる。するとリークが顎を撫でながら口を開いた。

「するとなんだ、シユテルちゃんが知り合いつていう事は、この坊主も嬢ちゃん達と同じつつう事か」

「そうです」

「なるほどなあ」

何か前情報があるのかリークは納得した顔をする。

そしてリークはユーノの方を向いて言った。

「事情は理解した。とりあえずお前は警戒するような人物じゃねえってこともな」

それと、とリークは言葉を続けた。

「お前が過去から来たってこともな」

「……はい？」

「いやな、アミタがシユテルちゃん達を連れてきた時に一通りの事情は聞いたんだわ」

だから、お前が過去から来たとか言っても驚かねえよ。とリークは笑いながら言う。

表情から察するに、サラサとミーナもその辺の話は知っていたようだ。

まあそこからは、特に間も詰まる事無く話が進んでいく。

「まあ。ユーノ君はその若さで考古学者なんですか」

「まだ、端くれですけど」

サラサがユーノの仕事等の話を聞いたり、ユーノが魔法を使える事を知ってミーナが質問したりなど。畏まった空気は霧散して柔らかな空気の中会話が続いていく。それから時間が過ぎて、今のエルトリアについて話をするのと、もう一人の元気っ娘と合流するために、ユーノはシュテルとリークと共に外へ出た。

第四話

「実際、シユテルちゃん達が来てくれて助かったぜ」

と、歩きながら語るリーク。

ユーノとシユテルは間にリークを挟む形で並んで話を聞いていた。

「博士の研究とアマタ達ギアーズのおかげで燈った小さな希望の光を、嬢ちゃん達がさらに大きくしてくれたんだからよ」

死蝕という現象によって徐々に死へと向かっていたエルトリア。

大切な故郷で暮らす事と、娘の未来の事を天秤に掛けて悩んでいたとリークは言う。

「大した事はしていません。ユーリもディアーチエもレヴィも私も」

「そう謙虚になんたって」

話しながら、リークは自分達の集落を、周囲の緑をユーノへ見せていく。

ユーノの瞳には笑顔で走り回る子供達や、精力的に農作業に勤しむ人達、談笑し合う人達の姿が、そして青々と繁る木々達が映る。

「アマタ達が、嬢ちゃん達が頑張ってくれてるおかげで、俺達は笑顔で今こうして笑顔でいられる訳だ」

そう締め括ると、リークはユーノへと顔を向ける。

「ユーノ、お前魔法が使えるんだよな」

「はい、それなりに」

「そんなら今日からお前は嬢ちゃん達と一緒に皆の魔法の先生なあと、俺の家で面倒見るから。よし決定」

「あの、お世話になっていいんですか？」

「遠慮すんな。部屋は空いてるし、逆に聞くが後は嬢ちゃん達のところしかあてが無いだろ」

事実だ。

さらに、シュテル達の家にお邪魔するのは気が引ける。

他に迷う選択肢が無いユーノは、その提案に甘える事にした。

「……では、お世話になります」

「おう。じゃあ俺は家に戻るわ。シュテルちゃんと話す事話したら帰ってきな」

そう言うとりークは手をひらひら振って去っていく。

ユーノはその背に頭を下げる。

そして、今度はシュテルについて歩きだした。

二人は今、シュテル達が暮らしている家への前にいた。

「どうぞ、上がってください」

「うん。お邪魔します」

扉を開けて中に入ると、「シュテルんお帰り〜」という声が聞こえ、ひよこつと一人の少女が顔を出した。

「はい、ただ今戻りました」

「うんっ！……む？君は……」
「久しぶり、で良いんだよね。レヴィ」

ユーノが言うと、レヴィはおー！と声を上げて少年を指差した。

「ユノユノだ！」

「……ん？」

聞き間違いかな。

ユーノは自分の耳を疑った。

「僕の名前はユーノなんだけど」

「……めんどくさいから、ユノユノでいいや」

「……」

そういえば、フェイトの事もオリジナルって呼んでたなあ。と思
い出すユーノ。

隣でポツリと呟かれた「レヴィはこういう子ですから」というフ
オロー？の言葉で、いつかとユーノは考えるのを止めた。

その後、リビングにてシュテルとレヴィが並ぶ形で座って向かい
合う。

「さて、状況を整理する事に致しましょう。まず師匠、貴方の世
界ではあの日から何年ほど時が過ぎておりますか」

「二年と少しだね。こっちは？」

「エルトリアでは四回程です」

「そうなんだ」

時の流れの違いに驚くが、そもそも時間も世界も違うのだからと

納得する。

そもそも、ユーノは狙って時間跳躍した訳ではないのだし。

「ナノ八達は元気にしていますか」

「……。……うん。元気にしてるよ」

一瞬、ユーノが言葉を詰まらせるが、シュテルは特に気にした様子もなく話を続ける。

「先に伝えておきますが、アマタ達が使用していた時空間移動装置ですが、私たちがこの世界に訪れた際に、その機能を停止させてしまいました」

「動かない？」

「残念ながら」

少し期待していたユーノだが、動かないのなら仕方ないと諦める。

「そういえば、他のみんなは？」

「ユーリとディアーチェは、アマタとキリエと共に用事で出掛けしています。その間、私とレヴィは留守を任されています」

ちなみに、二人が続けて会話しているので暇なのか、レヴィはチビチビと暇そうにジューズを飲んでいる。

しばらく話し続けた二人は話を総括する。

「師匠がここにいる原因が分からない以上は、時間跳躍に関しては今のところ特に出来る事ありません」

「うん。今の僕に出来る事は、リークさんのお世話になりながら、みんなの手伝いすることだね」

「そうなります。エルトリアの大地が完全に輝きを取り戻すまで

時間も掛かりますし、師匠には遺跡探索等も手伝っていただきたいです」

「了解したよ」

とりあえず方針が決まった。

話が一段落した後は、ユーノはシュテルとレヴィに連れられて、集落の人達に挨拶回りへ行き、暖かい歓迎を受ける事となった。

そしてこの日は二人とは別れ、ユーノはエクレア一家が待つ家へと足を向けた。

第四話（後書き）

文章が上手く繋がっていないと思われた場合は、アカツキの力量がこの程度ということですが。

この小説の方針ですが、エルトリアの死蝕に関してはアマタ達が頑張っているという事で、あまり触れない予定です。

エルトリアでは日常ぐらいですかね。

さて、これからは時間が飛んだりします。あと日常を書くのですが、予定一覧を下に、

・ユーノとシュテルの魔法教室

・ユノユノとレヴィのリリカルハンターポータブル

・ユノユノとレヴィと不思議なダンジョン

・ユーノとシュテルが×××

となっております。

あくまで予定ですので。

四人は後々合流しますので。

ご指摘、質問等々お気軽に。

では、これで失礼します。

×××は、別にいかがわしい事ではありません。一応言っておきます。

第五話（前書き）

某姫無双でいう拠点フェイズ的なもの。

今回はユーノとシユテルの魔法教室です。

文章が変ではないか少々不安ですが・・・。

それでは、どうぞ。

ユーノならこのぐらい出来る気がしました。

8時40分、こんなに防御はいらなないかと思い、プロテクションを減らしました。

第五話

ユーノが目覚めてから数日後、何日か置きにシュテルが開催している、集落で魔力を持つ人対象の魔法教室が開かれていた。

参加人数は十名（内子供が八に大人が二）。

参加人数は毎回このぐらいで一組で、後の組とローテーションで回している。

一度に大人数を教えるよりも、人数を分けてなるべく丁寧に説明したいというシュテル達の方針のためこのようになっていた。

教える魔法は初歩的な生活内でも使えるものや、中でも進歩が早い者には難易度が高いもの等を教えている（ちなみに、参加者達には簡易デバイスを渡している）。

今回からは、ユーノもその先生役へと回ることになっていた。

実際に教えていると、ユーノの物腰や説明の仕方が好感的に捕えられ、子供達から早い段階で親しまれる事となった。

そこまではいいでしょう。

これまでの事を回想したユーノは、頭に手を当てて空を仰ぎながら言った。

「……………どうしてこうなった」

そう言うユーノから離れた場所には、ルシフェリオンを構え準備万端という様子で彼を見るシュテルが立っていた。

始まりは、一人の男の子が言った質問だった。

「ユーノ兄ちゃんとシュテル姉ちゃんって、どっちが強いの？」

その質問にピタリと体の動きを止めるユーノ。まさか……と冷や汗を流しながら答える。

「僕とシュテルは分野が違うけど、どっちが強いかって言ったら間違いなくシュテルだよ」

何の嘘も交えず、間違っても危惧する事態にならないよう、心からそう告げるユーノだが、子供達はどうも納得した様子を見せてくれない。

「でも、お姉ちゃんがお兄ちゃんの事「師匠」って呼んでるよ？」

別の女の子の言葉に他の子達も頷く。

それはシュテルがそう呼んでるだけだよ。とユーノが説明するが、やはり子供達は不満げだ。

どうやって納得させようか悩んでいると、シュテルの口から彼にとって歓迎し難い台詞が出てきてしまった。

「では、簡単な手合わせをいたしましょうか」

ルールは簡単。

シュテルが放った砲撃魔法をユーノが防ぐというものだ。

「ねえ、本当にやらなきゃダメかな？」

「子供達の目を見ても、そのような事が言えますか？」

「……………」

ユーノがチラッと、安全な場所で二人を見学している子供達を見

ると、期待で目をキラキラとさせていた。
とても、やっぱり止めます等とは言えない。

「安心してください。ちゃんと手加減はいたしたす」
「……了解」

ユーノが覚悟を決める（諦めたとも言える）。
シュテルの足元に紅い魔法陣が現れ、構えているルシフェリオン
に魔力が集中していく。

「ブレイカーは無しね」
「……」
「今の間は何!?」

内心で残念がっているシュテルである。ユーノからしたら冗談で
は済まない事だが。

「……参ります」

準備が完了したシュテルはルシフェリオンをユーノに向け、子供
達が見守る中自身の最も使い慣れている魔法を解き放った。

「ブラストファイアアッ!!」

瞬間、紅炎の光が放たれ、先で立っている少年を飲み込みまんと宙
を駆け抜ける。

「—————」

ユーノが足元に翡翠色の魔法陣を顕し、両手を前に出しながら何

かを呟いた刹那、紅光が少年の前に顕れたシールドに衝突する。
周囲に轟音が響き渡り、爆発の煙によって少年の姿が埋もれる。
子供達は少女の魔法に興奮と驚きを示し、少年の安否を心配する。
やがて煙が晴れると、そこには無傷の少年が立っていた。
オオーツ！と感嘆の声が子供達から上がる。

「お見事です。さすが師匠」

「・・・ねえシユテル。手加減してくれた？」

「八割で撃ちました」

「それ手加減なの！？」

「防いだではありませんか」

「かなりギリギリだったからね……………」

疲れた様子でユーノは言う。

スファイアプロテクションを掛け、前にラウンドシールドと防備を固めておいて良かったと安堵しておく。まさか、半ば本気とは誰も思っまい。

「とりあえず、これで良いかな」

「そうですね。ではもう一度」

「ごめん。もう一回言っつて」

「もう一度」

「待って、それだとまた繰り返すことになる気がするんだけど。

何回やるつもり？」

「無論、師匠の防御を貫くまで」

「勘弁してください」

ユーノが綺麗な土下座を披露するも、結局繰り返す羽目になってしまった。

計三回となった攻防だが、何だかんだで全て防ぎきったユーノで

ある。その後、疲労で少しの間動けなかったユーノだが、おかげで子供達からさらに親しまれる結果となったのだから、良しとしておこつ。

無事、魔法教室を終えた二人は、並んで帰路を歩いていた。

「お疲れ様です」

「疲れたのは殆どシユテルが原因だと思っただけど」

「防御が堅い師匠が悪いのです」

「責任転嫁だよね、それ」

抗議するユーノの言葉をシユテルはサラリと流す。

意外と負けず嫌いな彼女である。

そんな風に今日の教室の事で話しや反省をしていると、突然シユテルが話題を変えた。

「そういえば、一つお聞きしたい事があるのですが」

「なにかな？」

「貴方が庇つたという護衛……ナノ八ですか？」

シユテルの言葉に立ち止まるユーノ。ポリポリと頬を掻いた。

「……何で分かったの？」

「リークさんの家で話していた時に、私は「護衛される人がする人を庇ってどうするんですか」と師匠に言いました。その時師匠はそれを理解している様子でした。にも関わらず庇うとしたら、ナノ八辺りではないかと考えました」

「察しが良いね」

「お褒めにあずかり光栄です」

シュテルはスカートの両端を摘んでお辞儀をする。
しかし、とシュテルは言葉を続けた。

「不意の襲撃とは言え、ナノ八が遅れを取るとは有り得なくはないといえど、考え難いのですが」

「……………それはね」

止めた歩みを再開させ、前へと進みながらユーノは言う。

「僕も含めて、周りがなのは止められなかったからなんだ」

「止める、とは？」

「なのは、出勤要請されてないのに積極的に事件に協力したり、訓練を休む間を惜しんで行ったりしていたんだ。休むように言っても、なのはは笑って「大丈夫」って言うから、僕達も強く言えなくてね。その結果、襲撃された際になのはは反応出来なくて、死にかけた」

「……………そういう事でしたか」

責任を感じていたのだろう。とシュテルは目の前の少年の心情を推測する。

なのはから聞いた話では、彼女が魔法を知るきっかけはユーノだと言っていた。

おそらく、魔法を知ったせいでその様な状況に遭遇してしまった。等と考えているに違いない。

付き合いはけっして長くはないが、彼がそういう人物だという事は理解しているつもりのシュテルである。

「ですが、それで貴方が死にかけ、その上行方不明になっては、なのはは責任を感じてしまうのではないのでしょうか」

おそらく、あちらでは死亡した事になっているのでは？というシユテルの言葉に顔を青くするユーノ。

なのはの事だ、ユーノと同等、いや現状を考えるとそれ以上に責任を感じるに違いない。

せめて、どうにか脱出して彼女に一言言葉を掛けていたら・・・と今更後悔する。

そんなユーノを見て何か思ったのか、シユテルは彼の両手を自身の手で包み込む様に握る。

そして彼の目を真っすぐ見詰めながら言った。

「でしたら、なるべく早く帰還の方法を見つけて、ナノハを安心させましょう」

言葉と同時に、フツと微かに微笑みを乗せてくる。

ユーノは一瞬シユテルのその表情に見惚れ、呆然としたが、同じ様に微笑み返した。

「そうだね」

「その際には、私もついて行きます。ナノハと約束していますから」

「ははは、じゃあそのためにもなるべく早く方法を見つけないとね」

「はい」

その後、二人は別れ、それぞれ暮らす家へと帰っていく。

この時二人は意識していなかったが、「一緒になのはに会いに行く」という約束を交わしたのだった。

第五話（後書き）

どうでしたか？

日時はこんな感じで書いて行きたいと思っています。

次はレヴィのハンターか、オリキャラのミーナかな？

ご指摘、質問等々はお気軽に、

では、次のお話で。

第六話（前書き）

初の一人称？です。

ただ、今回は今後絡ませていく予定のオリキャラ、ミーナ視点、のようなものです。

本編というよりは幕間と言った方があっていいのかもかもしれません。では、どうぞ。

第六話

最近、私ことミーナ・エクレアには興味深い人がいる。

その人は女の子にも見える中性的な顔で、綺麗な金色の髪で、線が細くて華奢な、友人の少女達と同じく過去から来たという男の子。名前はユーノ・スクライア。

現在は私の家で居候している。

私達が暮らすエルトリアにユーリ達が来てから六年。

彼女達が使う魔法は私達を、エルトリアの大地を木漏れ日の様な柔らかい温もりで癒している。

私達が彼女達から魔法を学ぶ様になったのは彼女達の好意が元でもある、私達の暮らしの為でもある、だけどそれらよりも大きい要因は別にある。

それは、魔法で癒してくれた彼女達を今度は私達が魔法で癒したいという事。

彼女達がそういう事を特に望まないというのは理解している。

別に魔法ではなく、別の事で恩返しするという選択肢がある事も分かってる。

確かにそういう考えも有りだ。

しかし、私達は、だからこそ魔法で返したいと思った。

だが私達魔法初心者よりも何段も上の彼女達に恩返し出来る日は遠い。

これは最早意地だ。

魔法で教えて貰った温かさを魔法で返したい。

私達はそんな思いを持って、彼女達から魔法を学んでいる。

少々話がズレてしまった。

本題に戻る。ユーノ・スクライアの事だ。

そもそも、私が彼に興味を持ったのは、彼が彼女達と同じく魔法が使える、しかも彼女達の内の一人であるシュテルが彼の事を師匠と呼んでいたからだ。

私達の恩人であり先生であり、目標でもあるシュテルが彼を師と呼ぶ。

私には衝撃的な事だった。

何日か彼を見ても、何故彼がシュテルにそう呼ばれているのか理解出来ない。

紅い炎の魔力を持つクールなシュテルと何処か抜けた感じがあるヘタレっぽい彼。

どうも、頭の中で上手く繋がられない。

先日開催された魔法教室で何かあったようだが、私はその時参加していなかったので何があったのか知らない。

興味という名の好奇心が抑えられなくて、私はシュテルに聞いてみることにした。

「私が師匠を師匠と呼ぶ理由ですか？」

「うん」

私に問い掛けられたシュテルは、何時もと変わらない無表情で少し考えるそぶりを見せる。

そして開かれた口から出てきたのは、

「それは、彼が私よりも優れた能力を持っているからです」

「……………ホントに？」

「はい。私は前から常々、彼からご教授頂きたいと考えています」
素直に驚いた。

彼が彼女にそう言わせるほどの物を持っているとは、失礼だけと思えなかったから。

「……………能力って？」

「魔法演算能力、簡単に言えば魔法を発動する速さと、魔法を扱う技術の巧さです」

「？」

理解出来ないでいる私を察してくれたのか、シュテルはそのまま話を続けてくれた。

「彼の魔法の展開速度と技術には目を見張るものがあります。現に私は、結界魔導師である彼に一度敗れています」

「……………結界魔導師？」

「護りに優れた魔導師の事です」

護りに優れた。

つまり攻撃で劣る彼にシュテルが敗れたという話だ。

それはともかく、確かシュテルは殲滅が得意だと前に言っていたはず。

話を聞く限り、彼とシュテルは戦う舞台というものが違っていると私は思う。

「……………」

「……………他にも、理由はあるにはあります」

私が黙り込んでいると、シュテルが何処かに視線を向ける。

私もそれを追いかけると、その先には子供達と楽しそうに戯れて

いる彼がいた。

「ナノハが言っていました。彼がいるだけで、心が落ち着くと、背中を任せられると」

「・・・・・・・・」

「私も、そのように言われる魔導師になりたいのです」

その言葉を最後に、シュテルは何も言わなかった。

シュテルが言った言葉。

普段、レヴィ達から頼られているとは何が違うのだろうか。

私にはまだ分からない。

シュテルの言っていた「ナノハ」とは、度々シュテルの話の中で出てきていた魔導師の女の子だ。

シュテル曰く好敵手。

そんな少女にそうまで言わせた少年・・・・・・・・か。

どうやら、私が彼を理解するまでは、まだしばらくの時間が必要だよつだ。

第六話（後書き）

エルトリアの人々のシュテル達に対する思いとか、
ミーナの現時点でのユーノへの印象とか。
今回はその辺を。

ご指摘、質問はお気軽に。

次回は、リリカルハンターの予定です。

・・・・・・・・今年もあと一日か、早いな。

第七話（前書き）

皆様、明けましておめでとございます。

よつやく、上げる事ができました。

今回、あれだけハンターやるとか言っていた割には、全くハンターらしくないものになってしまいました。

それでは、どうぞ。

第七話

まだ短い期間だが、エクレア一家にユーノ・スクライアがいるのに違和感が無くなってきたある日の事。

その日、昼食を四人揃って食べている時に、彼女は現れた。

「おっじゃましま〜すっ！！！」

バンツ！と勢いよくドアが開け放たれる。

四人が音の主へと視線を向けると、そこには集落の守人、少しだけ自重して欲しいくらい元気な娘と呼称される少女がいた。

「……………レヴィ」

「ミーナ、ユノユノ、リークさんにライラさんおい〜すっ！」

ミーナが名を呼ぶと、レヴィはやけに高いテンションで返す。気のせいだろうか。レヴィの瞳が爛々と輝いている。

「おうレヴィ、どうしたんだ？」

「んーとね。今日はユノユノに用があるんだ」

そう言いレヴィは座っているユーノの腕をガシツと掴むと、もう待ちきれないという様子で言い放った。

「一狩り行こうぜー！！」

「……………へ？」

リリカル ハンター
はじめから
とちゅうから
オマケ

高町教導官の演習場
スカリエツティ博士の調合教室

集落からすこし離れた地域。

豊緑が生い茂るその場所を、二人の少年と少女が歩いていた。

「　　」
「　　」
「………はあ」

片や上機嫌で鼻歌を歌うレヴィ、片や疲れた様子のユーノ。
相反する様子ながら、レヴィもユーノもそれぞれ襲撃服とバリア
ジャケットを装備して何処から見ても準備万端の状態である。

「何だよお、ノリ悪いな」
「だって、さ」
「ここまで来たんだから腹を擦れよな」
「それを言うなら「腹を括れ」かな」
「そうとも言つ」

胸を張って言うレヴィに、ユーノは腹を括るしかないかと諦めた。

そもそも何故二人がこんな場所にいるのかと言つと、始まりは昼間のレヴィの台詞だ。

レヴィはこのエルトリアに来てから危険生物の退治を主な仕事（趣味）としてきている。

そして今日、レヴィはユーノを誘ったというわけだ。

「そういえば、レヴィっていつもどんな生物と戦ってるの？」

疑問に思ったユーノは前を歩くレヴィの背中に質問を投げ掛ける。

「ううとね、スツゴク大きいドラゴンとか、かなり大きいオオカミとか、まあまあ大きい亀とか、ヤバイぐらい大きいナメクジとかだよ」

「・・・ナ、ナメクジ？」

「うん。ナメクジ」

「ヤバイってどのくらい？」

「こゝろんぐらい！」

レヴィは腕を限界まで広げて大きさを表現しようとする。

言葉と頑張つて腕を広げる様子から察するに下手したらドラゴン並に大きいナメクジとか、想像出来ないししたくない。

「レヴィ一人で倒したの？そのナメクジ」

「ううん。あの時はユーリと王様とキリエと一緒にいたよ。最初

見た時、三人とも凄く気持ち悪がってた」

「だろうね」

「それでナメクジが王様とキリエをネバネバにしてさらに服を溶かしちゃってさ。怒った二人がバンバン撃ちまくって一気に倒したんだ」

「そ、そうなんだ・・・」

何とかそう返事をするのが、ユーノにとっては精一杯だった。
一瞬、桃色な光景が頭に浮かびそうになったのは仕方ない。男の子だし。それを即座に封じ込めただけ賞賛に値する。

「あれ、今日は何を倒すの？」

話題を変える意味も含めてユーノは問い掛ける。

実は先ほどから一定範囲内をグルグルしているのだが、未だに何かと出会う気配がない。

もしかしたらランダムに出会った生物と戦うのか。とも思っていたユーノだ。

「んと、今日はねー」

レヴィの話聞いてみると、今日はシュテルから頼まれたらしい。どうも一度集落近くまで来たとある生物が、この辺を徘徊しているとのこと。

未だに生態はよく分からないが、もし集落に来たら面倒だ。故に念のため討伐するというのが今回のクエス……。仕事内容だ。

「ただ、大きくて白っぽいオオカミなんだって。まあ僕にかかればちよちよいのちよいだけどね」

「そっかあ」

何だろう……。何か妙な予感がするんだけど。

「どこだあー！」と周囲に声を響かせながら前を歩くレヴィの背中を追いつつ、一抹の不安を感じるユーノであった。

「チエーンバインド」

行使する魔法の名称を唱えるとほぼ同時に魔法陣から現れた翡翠の鎖がその生物の三つある内の二つの首を締め上げる。

急所と言える場所を二カ所締められた事により、転倒し、抜け出そうともがき始める。

そこにすかさず、無事な状態の残りの一つにレヴィが愛機のバルフィニカス（大斧形態／クラッシュヤーフォーム）を振り下ろす。

「とりゃあああつー！！！」

ズゴンツ！と地面が陥没する程の力をモロに喰らってしまったため、三つ首の口から泡を吹いて気絶してしまった。

「どーんなもんだ！」

「お疲れ様」

決めポーズ決めているレヴィの横にユーノが並び立つ。そして目の前で倒れている生物を興味深そうに見る。

「それにしても、この生物って・・・」

「ケルベロス！」

「いやこれ、頭が犬とか狼じゃなくて猪なんだけど」

二人が倒したのは、平均的な大人の身長ぐらいで、体毛は固く、ユーノの言うとおりの首が三つある猪であった。

もちろん、このケルベロス（猪）はターゲットではない。

歩いている時に、偶然レヴィが寝ているケルベロス（猪）の尻尾を踏んでしまい、それに怒ったケルベロス（猪）が襲い掛かってきたため、やむを得ず戦ったのである。

「このケルベロス（猪）はどうするの？」 「持って帰って食べる」

「……………これを」

「上手に焼けば大丈夫！」

ふと、ユーノの頭に音楽と共にグルグルと肉を回し焼くレヴィの姿が思い浮かぶ。

全く違和感が無い。

「ねえねえユーノ、これに結界しといてくれる？ 後で取りに来るから」

「了解」

魔法の無駄遣いか有効利用か。

頼まれた通りにケルベ…………面倒だから、合わせてケルイノスで。

ユーノはケルイノスの周りに結界を張る。

「それにしても、白っぽいオオカミいないなあ」

レヴィが疲れた、というか飽きた様に溜め息を吐く。

しばらく歩いていた二人だが、会ったのは今のケルイノスだけだったのだ。レヴィ曰く、普段なら色々と危険否危険問わずに会えるらしいのだが。

「今日は、一旦帰る？」

「うん……………」

唸りながらレヴィは考える。

空は赤くなり始めている。

このまま搜索を続けていると、ヘタすれば夜になってしまつ。遅くなるとシユテルに怒られる。けれど、諦めて帰るのは悔しい。

「んう~~~~」

「.....ん？」

ついには頭を抱え始めたレヴィにどう言葉を掛けようか考えていたユーノは、ふと視界の端に白っぽい何かがあるのに気がついた。

ユーノはその何かの方へと視線を向ける。

「う~~~~」

「ねえ、レヴィ」

ユーノが視線を固めたまま、レヴィの肩を叩く。

「何だよお」

「.....」

ユーノは何も言わずに、自らの視線の先を指差した。

レヴィはその指先をスーツと追っていく。

「.....」

「.....(ウルウル)」

すると二人の視線の先には、先ほどのケルイノスよりも二、三倍ぐらいに大きい、白っぽいオオカミが潤ませたつぶらな瞳で二人を見下ろしていた。

二人と一匹はその体勢のまま固まってしまつ。

「……………」
「……………」(ウルウル)」

すると、オオカミを見詰め返していたレヴィが表情を変えないまま、バルフィニカスを大斧形態から大鎌形態スライサーフォームへと変形させ――

「光翼斬つ!!」

――縦に高速回転する青い魔力刃をオオカミの顔面目掛けて振り放った。

だがオオカミは何の動作も見せぬまま、抵抗なくスパツと縦に綺麗に二分割され、右と左がベチャツと地面に倒れた。

「レヴィイイイっ!?!」

「ありゃ?」

少女の不意打ちにユーノが疑問を乗せて絶叫する。

対して、レヴィはバルフィニカスを振りかぶった体勢で小首を傾げていた。

「体が勝手に……………」

「ええ……………」

「でもまあ、あんなので簡単にやられちゃうんだったら、戦っても楽しくなさそうだったからいいや」

「……………いいんだ」

「もーまんたいっ!」

倒れた体の下から、つぶらな瞳が覗いている。

まるで「卑怯だよ。酷いよ……………」と訴え掛けてきているようだ。

「んじゃ、とつとと帰ろ」

「まあ、いつか。早くシユテルに報告しなきゃね」

レヴィが満足したならいいや。とユーノは諦めにも似た、というか諦める事にして、ケルイノスを担ごうと挑戦しようとするレヴィを止めるために動きはじめた。

結局、ケルイノスはユーノが転移魔法で送りました。

ユーノとレヴィが去ってからしばらく経った後。

倒れていた白っぽい体がウネウネとうごめき始め、やがて集結して一つの塊となった。

塊はその後、ズーツと地面を這うように何処かに去っていく。

塊が這っていった道には、何かヌメヌメとしてテカる液体が残っていた。

第七話（後書き）

……一応、ディーアーチエ達の服ってバリアジャケットと同じようなものなんでしょうが、それを溶かすって凄いナメケジです。

遅れたこと、ここでお詫び申し上げます。

リリカル ハンターはまだ続きます。

次回こそ、ハンターらしくするつもりです。

そして次話は、やりたかった事の一つめをやる予定です。

ご指摘、質問等はお気軽に。

では、失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8232z/>

翡翠と少女達 ~ 遠く離れた世界で ~

2012年1月5日01時52分発行